

中学校における国際感覚をもった生徒の育成

-視覚資料を活用した道徳の教材開発を中心に-

高度学校教育実践専攻
教職実践力高度化コース
宮本 和明

実習責任教員 芝山 明義
実習指導教員 池田 誠喜

キーワード：国際感覚，心の教育，交流活動，国際理解教育，日本人学校

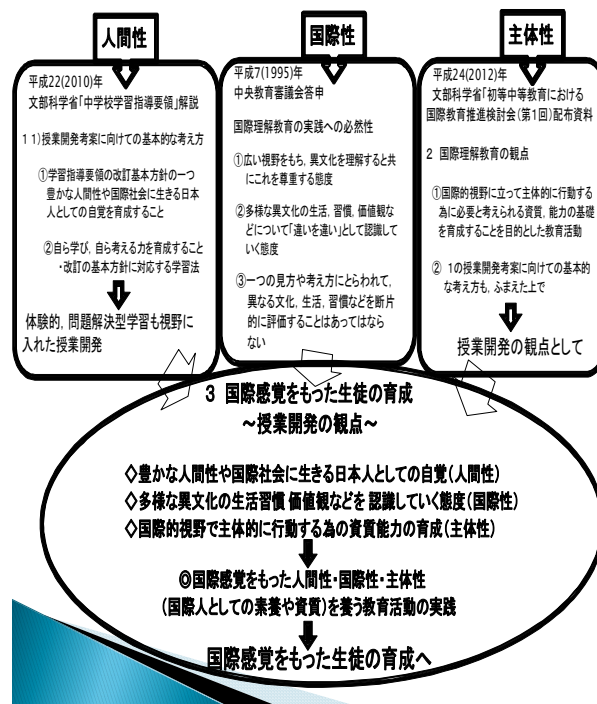
I 実践の研究課題と目的

これからの時代を生きる中学生には，国際人としての心豊かな国際性や人間性を持ち，主体的に生きていこうとする国際感覚を身に付けていくことが求められていると藤原(2011)は指摘している。

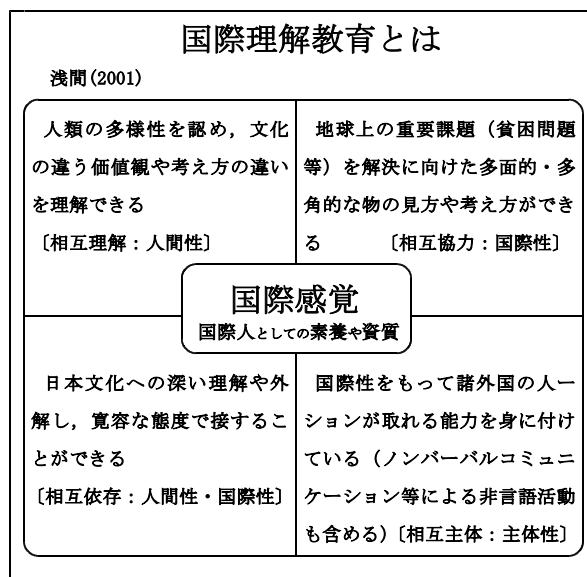
これに関連して，実習生がかつて勤務したメキシコ日本人学校では，正式名を日本メキシコ学院(以下「国際校」と言い，日墨の異文化体験で得た価値を想起しつつ補充・深化・統合し，その価値を自己の内面で深く自覚し，国際性をもって自分の生活に生かしてゆく態度や意欲を養うため，様々な交流活動を展開していた。

実習では，それらの活動なども参考にして，藤原(2011)の示唆する「国際感覚をもった生徒の育成」を目的とした授業開発を行うこととした。

その際には，教育政策動向をふまえ，授業開発における3つの観点(図表1)と，浅間(2001)の提言する「国際理解教育」で重視されるべき4つのポイント(図表2)も考慮する。



図表1



図表2

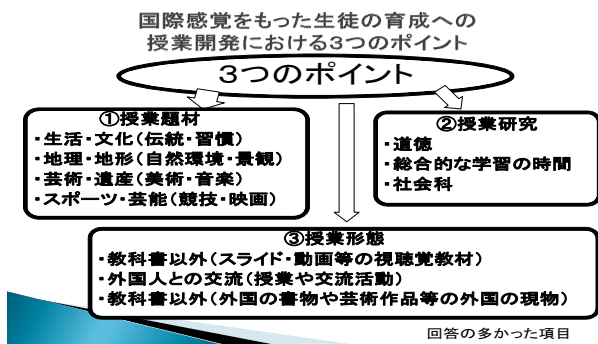
II 実践研究の方法と分析・検討

1 研究課題に関する実習校の現状と課題

1) 事前アンケートの計画と実施

国際理解教育について、国際校では、多種多様の交流活動により異文化理解を直接的に育んでいる。これに対して、実習校では、その必要性、学習時間の設定や予算等の面で実施は難しい。そこで効果的な国際理解教育が展開できる「授業開発」に取り組むため、生徒や教員の外国に対する認識や国際理解に関する意識の実態把握を目的に、アンケート調査を実施した。

その結果（図表3）から、国際感覚をもった生徒の育成への授業開発における3つのポイントとして、回答の多かった項目をもとに、「授業開発」に当たり、①生活・文化（伝統・習慣）、②道徳の時間で学ぶことができる授業研究に取り組み、③授業形態として、教科書以外（スライドや動画等の視聴覚教材）等を考慮し、取り組むこととした。



図表3

2) 実施時期と内容

平成30年4月～10月は、授業開発と事後アンケート、平成30年11月～平成31年1月は、実習結果の考察と最終成果報告書の作成。

III 実践研究の実際と考察

1 生徒観の考察と道徳教育の価値項目との整合性

1) 生徒観の実態把握

生徒の「国際感覚」の現状やその関心度の変容をみるため、実習校の共用掲示スペースに国際感覚促進啓発のためのコーナーを設置し、日本人学校の記事や先行事例の資料を掲示した(図表4,5)。その内容は、①メキシコ日本人学校の1年間(中3)の歩み紹介、②掲示に対する生徒からの質問・感想を入れる「つぶやき箱」への回答・掲示物の考慮、③県にゆかりのある偉人の国際交流に関する記事・画像、④メキシコ日本人学校の国際交流に付随する記事・画像の順とした。この活動により、生徒からの質疑に応じながら、関心度の高い記事や画像を検討して生徒の意識(生徒観)を確認しつつ、効果的に国際感覚を育むことのできる教材や指導方法を考察した。



図表4



図表5

生徒観の考察として、交流の様子から、「外国人と交流できるのがいいなあと思った。」「自分も話してみたい。」「言葉や文化が違っていても楽しそうな交流に参加してみたい。」、国際交流（第九）より、「他にも徳島にゆかりのある国際交流を知りたい。」などの感想から、人間性としての自発的な国際社会や国際交流への学習意欲が見られた。

次に、メキシコ文化の記事から、「セマナサンタとは？」、国際交流（第九）より、「なぜ、アジアで初演になれたのか？」、交流学習では、「言葉や習慣の違いに戸惑うけど、どうして一緒に取り組めるのか？」などの質疑から、国際性としての異文化に対する「違いを違い」として認識して行こうとする傾向が見られた。更に、福祉施設訪問より、「メキシコにも困っている人を助ける施設がある事がわかった。」「母子は何人位いるのか？」「どんな境遇の人たちが入居できるのか？」「できれば参加してみたい。」などから、主体性としての国際的視野で国際活動への理解や協力を自ら行っていきたいとの動向が見られた。

以上から、日本人としての「自覚」、他国の人や文化に対する「寛容さ」や「人道的」な活動への意識の変容が顕著に表れたと推察した。一方、道德教育の価値項目（C-(18)国際理解：国際貢献）の内容項目の指導の要点から、「人間性として、中学生は、グローバルな相互依存関係の中で生きており、国際社会で生きる能力を身に付けていく必要がある、国際性として、異文化への多様性の尊重や価値観の異なる他者との共生への考えを深慮していきながら、主体性として、異文化（言葉・生活習慣等）への差別や偏見をもたず、公正・公平に接していくことが重要である」と挙げられており、特にこれは国際社会

共通の「道徳的な価値」であると、文部科学省(2015)の「新学習指導要領（特別の教科 道徳）」の中で明示されている。これらも考慮して整合性の検討を行った。そして、道德教育は、道徳的实践力を養うことが重要であり、道徳行為の道徳性の必要性（内面化された道徳に基づいて道徳行為を明確にする特性）を挙げ、その内面化された道徳性を「心」として捉えると、実習者が取り組んでいる国際理解教育の国際感覚をもった人間性・国際性・主体性を養っていく「心」に、「整合する」と解釈できると考えた。

これらより、新学習指導要領（特別の教科 道徳）C（集団や社会との関わりに関すること）18（国際理解・国際貢献）に焦点を当て、「単元構想・各学習時間の展開」を考えた。

次いで授業実践における教材開発については、徳島県に関連する偉人の取組（人道的救済活動等）の検討並びに日本人学校での諸活動や「現代的な課題」を取り入れた他国の生活（諸問題）や文化（伝統・習慣）などを題材にし、今後の授業実践のモデルとなる指導案の作成を進めた。

2) 教材開発（単元構想と各学習時間の展開）
①単元構想、目指す生徒像は、〈世界における日本人として、他の国の人の文化や習慣を理解・尊重し受け入れようとする態度を持つとともに、我が国及び諸外国に存在する困難な状況にある人たちへの自己の役割や生き方を思い考え人類の発展についての認識を深慮していくことができる生徒を育む。〉とした。

次に、国際理解教育と道德学習の関わりとして、特に、人間性・国際性・主体性に即した内容を考慮し、道徳的实践力（内面化された道徳性）を深める単元構成を考えた。以上の単元構想や単元構成を基に、②各学習時間の展開を考え、自作教材の作成を行った。自身の体験も思

慮し、ねらいとして、〈メキシコの貧困問題から学ぶとし、この地球上には貧困や飢え、病気などの過酷な生活状態を強いられている子どもたちが存在していることを知り、そのような子どもたちのために、「自分には何ができるのだろうか」などの心情を思い考え養わせる。〉ことにした。尚、授業実践は、平成30年10月23日5校時、実習校の中1(男子3人、女子4人)に対して実施した。

IV 実践研究の成果と課題

1 授業実践後の道徳的实践力（内面化された道徳性：「心」）

成果としては、他者への寛容さや奉仕活動への積極性（人間性・主体性）、他生活の思慮から自身の生活に感謝する自省（国際性）などが示された。

次に、課題としては、様々な価値観の人々との協働により、進んで課題解決を目指す態度を育み、現代的課題と道徳的实践力を効果的に組み合わせ、複合的に自分との関わりの中で学べる教材、生徒が心から納得できる形で道徳的实践力を習得し、現実生活に活用できるよう支援等を行っていくことにより、道徳観をもった国際理解を学習することによって、豊かな「人間性・国際性・主体性」を養える自作教材の開発が必要不可欠であることが分かった。

最後に本実習で取り組んだ国際感覚促進啓発コーナー並びに授業実践で、生徒と教員にアンケート調査を実施した。

アンケートの結果から、掲示物では、生徒・教員とも高い関心を示し、人間性・国際性・主体性への助長・促進に繋がった。

授業では、生徒から「授業内容が分かりやすく、世界の人々の状況が分かるとともに、国際

問題は知っておくべき」、「これからは、自分たちの身の回りの事だけでなく、世界の事を学んで置かないと支援や協力ができないから」、「今の国際社会が、どうなっているのかを知ることが、大人になってボランティア活動に参加する時に必要になってくるから」などの回答があり、研究課題の目的であった、「中学校における国際感覚をもった生徒の育成」としては、実現できたと考えられる。

このように、単元構想や単元構成を十分に深慮し、各資料から学ぶ学習活動も含む多種多様な活動の実践や海外の学校と国内の学校との国際理解教育への取組意義等を分析・検討し、道徳観をもった国際理解（心の）教育の展開・継続・発展等を重視することによって、国際感覚をもち国際社会に生きる生徒の育成に繋がる教材の考案が重要であることが分かった。

V 学修の振り返り

1 2年間の学び

教員としての責務と自覚の再認識の必要性が理解でき、内面的なコアカリキュラム構築や未来志向も視野に入れた人間育成など、様々な学習思考や手立ての拡張習得に繋がった。

2 今後の展望

国際感覚をもった生徒の育成には、教育機関や日本人学校を含む学校現場に関する情報収集、文献や事例分析の検討・活用・内省が重要である。

また、国際人としての素養や資質を養える教材開発や多種多様の交流活動の導入や参加などを行っていきける教育活動を念頭に参酌し、継続実践していくことが必要不可欠である。